

Miku la Chic

エウリピデス

'Ariettes oubliliées' より

C'est l'extase langoureuses... , L60-1

Op.4

作曲 クロード・ドビュッシー

Claude Debussy 1862-1918 1886 年頃（楽譜出版は 1888 年）

— 創作日本語歌詞による —

2022 年 1 月 9 日 β 3 版

さみだれ
五月雨 あがりの

まほろばの プリズム

うとうと不思議な 手招きする
Ah、小波だけが くねくね 揺れる

だれにも 見えない
悪ふざけ 媚薬 強か、
冷やかに あらまほしき声が、、、
失せる 言霊さえ ああああ、もう
ああもう、やだな、、、

あの空のむこう 滲んで 霞み
ほどける 時空！
リュミエール！
アポロには 届かなくて、、、
ほら、もげた翼、舞う

◎制作ノート

小学生に上がった頃、学校帰りの空き地で、顕微鏡で標本を見るときに使うガラス板を見つけた。古い在庫を投棄したものでしょうか新品同様、、それを拾って帰り、どこかで見た記憶を辿ってプリズムを作ろうと考えた。3枚を三角形にして輪ゴムで両端を止める。両端の口に消しゴムで栓をして水を満たせば出来上がりだが、ガラス同士の隙間から水がダダ漏れてしまう。家の中には木工用ボンドしかないので、それを塗って乳白色から透明になるのを待った。そして、北側にある薄暗い小部屋の、頭くらいの高さにある窓に、踏み台を持ってきて、雨上がりの景色を見た。未舗装の砂利道にはいくつも水溜りが出来ており、軒下からは雪がポタポタ落ちてくる、いつもどおりのどんよとした雰囲気だが、、水溜りのところでさつと風で波立ったところがキラキラ輝いた。しかもその輝きが虹色である。雨だれの雪が落ちると虹が落ちた。両手で持ったプリズムをぐるぐるやると、通り過ぎる車のように、虹がすっと左から右、右から左へと横切るのである。ボンドが溶けてどんどん水が抜けていく自作のプリズムに何度も水を満たして、ずっと眺めていた。

プリズムが光を屈折させて虹のようなスペクトルを作ることは、このデジタルガジェットと動画全盛の時代、面白おかしく楽しむ子供はいないかも知れない。この頃、アポロ11号によって人類が初めて月面に降り立ったあと、惑星探査機ボイジャーが木星に接近して鮮明な写真を送ってくるという未来の直前、電子ブロックとか歯車がついた三角定規のようなものに鉛筆を入れてグルグルまわすと幾何学模様が出来上がるといった趣向のサイエンスチックなおもちゃが次々と登場したのだった。

ドビュッシーが活躍した時代、印象派の画家たちが、伝統的などんよりとした色使いに見切りをつけて、原色に分解するといった手法を持ち上げはじめたとき、それは「虹を解体するようなものだ」と異を唱えた詩人がいた。対象そのものがもつものを野蛮なやりかたで分解してしまうあたりは、

現代のピュアオーディオファンが、本来連続する音の響きをデジタル処理でズタズタにしてしまうから魂が抜ける、みたいな言説に通じているのかも知れない。

それはともかく、プリズムは人間の眼には見えない光を目にみえる形に変換する光学装置という見方も出来る。照らすほうの光は、空間に体積をしめる何物かに当って四方八方へと広がる事後にならない限り、見えない。プリズムは見えない光の進む針路に一手間かけることで、普段見る物を照らす光を、普段とは違ったものが見えるようにする魔法の小箱、という見方も出来るかもしれない。進路とは、時間をかけて空間を進んだ歩みのことだから、一種の時空を曲げていると考えるには無理があるだろうか。

さて、独自の光の理論を展開して今際の際に「もっと光を」と叫んだ文豪がいたとかいないとか、ということから、フランス語で日光や明かりを意味する「lumière リュミエール」にご登場願った。誰にも見えない光の時空をほどく装置＝プリズムという洒落は、果して通用するのか、やや怪しいが、こういう言葉遊びは、もちろんドビュッシーが敬愛するメーテルリンクの手法の猿真似である。

ドビュッシーの歌曲はフランス語の発音そのものが持つ響きを編み上げたものだ、という説明はよく耳にする。これはなかなか日本語を母語とする者にはつかみ所のないところだろう。それは自分とて同じであり、もう宿命のようなものである。しかしながら、楽曲に日本語をあてるということをしてみると、ドビュッシーがなぜ文豪たちが集まるサロンで「わたしは辞書を読むのが好きです」などという発言をしたかが、ちょっとだけ分かるような気がする。最初(小松耕輔の伝記を読んでいる最中)は、ドビュッシーは恵まれた高等教育を受けていなかったために、少しでも文豪たちの話についていけるように、という哀れで野暮ったい苦勞譚のようにも思えたのだが、ドビュッシーが読んでいたその辞書は、現代でいうところのポケット辞書とか、学習参考用辞書みたいなものでなく、毎日お世話になっているロベールのようなフランス語の大辞典だったに違いない。この辞書は文

例がとりわけ豊富であり、語源の解説も充実していることから、おそらくは、言葉の語源とか、応用発展してきた時代背景とか、同じ韻をもつ言葉を辿っていく、、そういうことをして語感を磨いていったのではないか、と思ったりもするのである。創作に行き詰まった芥川龍之介などもそう、だったらしいので。

というわけで、光とプリズム、技芸の切磋琢磨の象徴として、エウリピデスと、光明・音楽を司るアポロンにご登場いただいた。曲の最初の和音が何か前奏曲集第一巻の『デルフィの舞姫』を思わせるところがあるようにも感じられる、というのも一因かも知れないが、、なにかドビュッシーの思惑で躍らされているだけに思えなくもないが、、まあそれを楽しむのも一興だろう。

音源としては、ラウドネス重視のモダンピアノではなく、まるでギターのフィンガーのような余韻と優しさを兼ね備えたプレイエルが馴染むのではないかと感じた。

構成：初音ミク NT (Dark)、プレイエルピアノ

初出：令和四年一月九日